

ハラホト文書 No.073 における「中都」のパスパ文字表記

中村雅之

1. 問題点

昨年出版された『ハラホト出土モンゴル文書の研究』(吉田順一&チメドドルジ編、雄山閣、2008)はパスパ文字研究にとっても非常に有用な資料を多く含んでいる。その一つに No.073 という整理番号の付された資料(右写真)がある。この断片には「中都」という漢字のいわばフリガナとしてパスパ文字が記されている。その表記が興味深い。



「中都」の漢字音を表すパスパ文字表記は、『蒙古字韻』や碑文などの標準的な綴りでは「juŋ du」である。しかし、右の文書に見える綴りは全く異なる。『ハラホト出土モンゴル文書の研究』における解説では、この箇所のパスパ文字を「čüŋ f'uw」と読んでいるが、最初の音節の母音部分を「ü」と読む理由がない。以下に私案を示し、このような例外的な表記が生まれた背景を探ることにする。

2. 私案

まず、記されたパスパ文字を素直に読むと、「中」のフリガナ部分は「čüeg」となる。しかし、これでは「中」の漢字音として余りにもかけ離れており、誤記を含んでいる可能性が高い。私見では「čüŋg」を意図した綴りではないかと思う。「ŋ」の部分の上部の横線を誤って脱したものであろう。ただし「čüŋg」という綴りであるとしても、相当に風変わりである。この風変わりな綴りができた原因は、おそらくウイグル文字表記の漢字音を模倣しようとしたことにある。「中」の漢字音はウイグル文字では通常「čüŋg」(翻字では{čWNK})と表記される。本資料の筆記者はウイグル文字表記には精通していたが、パスパ文字の漢字音表記には疎かったために、ウイグル文字表記をヒントにしてパスパ文字表記をひねり出したのではあるまいか。本来「čüŋ」で十分なのに、さらに「g」を付しているのは、ウイグル文字{NK}の{K}の部分になぞったものと考えればいくらか納得がいく。ウイグル文字では「ŋ」を表す単独の字母がないために{NK}と綴ったのであった。パスパ文字には「ŋ」が存在する以上、それで十分なはずだが、「g」という蛇足を添えたのは、ウイグル文字に

慣れ親しんでいた故であろう。声母「ど」については、漢語の無声無気音をモンゴル語の無声音で理解した表記と見なしてよかろう。この対応は、実際の音声に基づくならば、あり得ることである。

次の「都」は標準的なパスパ文字漢字音表記では「du」となるが、ここでは「t'uw」である。これもウイグル文字表記をパスパ文字に翻字したものと考えられる。ウイグル文字モンゴル語碑文に見られる漢字音表記には、円唇母音を持つ音節において共通して見られる特徴がある。すなわち、前の音節と連書される場合には「tu」のように母音は一つしか記されないが、分かち書きして記される場合には「tuu」のように母音が二つ記される。パスパ文字には通常「-uu」という綴りはないので、「t'uw」ということになったのであろう。声母については、「中」の場合と同様に、漢語の無声無気音をモンゴル語の無声音に対応させたものである。

3 . 小結

この一枚の写本断片が教えてくれることは決して小さくない。パスパ文字のように比較的整った正書法を持っている文字であっても、それを熟知していない一般の人々にとっては必ずしも扱いやすいものではなかったことが分かる。とりわけ漢字音表記については、実際の発音以外に伝統的な等韻学の知識を必要とするため、慣れるのには相当の時間を要したと思われる。しかし、裏返して考えれば、そのような人々でもパスパ文字を実際に使っていたということであり、パスパ文字は一般に想像されるよりも広く用いられていたと考えざるを得ないのである。